

A) 「読解力」はどうしたら身につくの？

読解力は、勉強したからといってすぐにその成果が現れるものではありません。まず「文章を読むことに慣れる」のが大切です。短い文章でかまわないので、毎日読むようにしましょう。その時には、ただ読むのではなく、「何が書かれているのか」を考えながら読み、できれば題をつけたり、感想を書いたりすると、より一層力がつきます。読解力・表現力を驚異的に上げるには、**新聞コラムを毎日読むことをお勧めします**。毎日続ければ、必ず成果が出てきます。どの新聞のコラムでもよいので、毎日必ず目を通し、「今日のテーマは『——』だ」というように、文章に題をつけていきましょう。

B) 魔法の教材『新聞』

私たちに、「情報」や「知恵」を毎日届けてくれるものが新聞です。新聞は、素晴らしい栄養がぎゅうぎゅうに詰まっている、まさに魔法の教材です。ただし、新聞には「読み方」があるのです。キミたちは、日頃どういう風に新聞を読んでいますか？

一番目に裏面の「テレビ欄」、二番目に「スポーツ欄」、三番目に「三面記事」で終わっていませんか？新聞に触れない人よりもいいかもしれませんが、これでは、せっかくの新聞も活用されていないのも同然です。

新聞は、やはり一面から読んでください。時間が無い人は、一面から「見出し」を追うだけでもかまいません。一面には、その日の新聞記事の主な内容や、トップニュースとして上げられる世の中の動きなど、5~6題の見出しがまとめて載っています。たとえ天気予報だけでも、「傘を持っていくべきかどうか」の判断材料になるし、天気図などは、理科の勉強にも役立ちます。

二面には「社説」が載っていますが、これは読む必要はありません。小・中学生には難しすぎるし、しかも面白くありません。ですから、せめて見出しだけでも追いかけてみて、関心のあるところだけを読み、その後、自分の好きなスポーツやテレビの情報を見ればよいのです。

新聞は、中学卒業以上の学力を持つ人向けに書かれています。義務教育では、**小学生の時に 1,006 字、中学生の時に 939 字を常用漢字**として習得します。新聞は、この常用漢字 1,945 字プラス人名用、地名用漢字を基本として書かれています。ですから、新聞の主な栄養素である 700~800 字で書かれている論説文「コラム」を読むと、中学卒業程度の読解力が、半年位でいつの間にか身についてしまうのです。しかも、この「コラム」には「見出し」がついていません。これには、「読者が編集長になり、自分で見出しをつけなさい」という願いが新聞社側にあるのです。

この「**コラム**」に見出しをつけることにより、「**表現力**」が身につきます。また、この「コラム」は、起・承・転・結の「論説文」の形で書かれていますので、大学入試の時の論文試験などの基礎を身につけるためにも、とてもよい教材のひとつとなります。

早ければ早いほど、素晴らしい国語力と感性が身につくでしょう。出来れば小学 4、5 年生の頃からチャレンジして欲しいものです。もちろん、その頃は読めない漢字もあるでしょう。その時は、お母さんやお父さんに聞いて、一緒に読んでもらいましょう。また、「自分は～といった題をつけるけれど、お父さんはどう？」といったように、お父さん、お母さんの意見を聞くのもよいでしょう。

同じ文章でも、読むのに 6 分かかると 1 分で読める人といった差が出てきます。この差は小学 6 年生くらいまでに出てくるのですが、1 分で読める人には、読めない漢字はほとんどありません。内容も理解できています。ということは、読解力のスピードがある人は、1/6 の学習量で済むということになります。せっかく身近に良い教材（新聞）があるのですから、「コラム」だけは毎日読むようにしたいものです。なぜなら、1 年で 365 の知識の栄養を取得できるのですから。

◎新聞の論説文をチャレンジして読んでみましょう！

読んだら見出しをつけてみましょう！ あなたが編集長です！

ざわわ ざわわ……と繰り返す「さとうきび畑」は、好きな曲だ。沖縄の悲しみを、情感を込めて歌う。だが以前から、少し気になっていたところがある。〈むかし 海の向こうから いくさがやってきた〉のくだりである。

戦争は、海に生まれた台風ではない。「鉄の暴風」と言われる沖縄戦の悲劇は、自然の営みではなく、人間の愚かな営みの果てに起きた。「いくさがやってきた」が呼び起こすイメージは、美しすぎはしないか。やって来たのは、武器携えた「日米の軍隊」だったのだから。

日本軍は住民を避難させず、戦いにも駆り出した。軍民混在の戦場は、「ありっただけの地獄を集めた」（米軍報告書）と形容惨状を生む。集団死（自決）も各地で起きた。軍の強制があったことは沖縄では常識である。

その記述が教科書から消されることに、沖縄は怒った。抗議の県民大会は11万人でうねった。「分厚い教科書の中のたった一文、たった一言かもしれません。しかし、その中には失われた多くの尊い命があります」。高校生、照屋奈津美さんの訴えが胸を突く。

大学に進んで、日本史の教師になりたいという。醜くても真実を教科書にとどめ、沖縄の痛みを共有してほしい。そんな願いを込めた、本土への呼びかけでもあっただろう。

ざわわ……は、詞旋律が深い悲しみをたたえ、それゆえに人を癒やす不思議な歌だ。その癒やしの花が、「ありっただけの地獄」に根ざしていることは、知っておきたい。島の悲しみが、容易には消えないことも。

（朝日新聞 10月3日「天声人語」）

テーマ（題・見出し）

* 新聞コラムの読み方：

1. 「天声人語」（朝日）、「余禄」（毎日）、「編集手帳」（読売）など新聞コラムのどれかひとつを毎朝読む。
2. 読めない「漢字」、読みながら意味不明の「語句」には赤ペンでマークする。
3. 赤ペンでマークした、分からない「漢字」「言葉」はおうちの人に聞く。
（朝は時間が無いので辞書を引く必要なし！ 親を利用しろ！）
4. もう一度読み直して内容理解。
5. 「見出し」をつける。（自分が編集長になった気持ちで！）
6. 夕方、お父さんやお母さんだったらどういう見出しをつけるか聴いてみる。
（保護者の方も良ければ子どもさんが学校に行っている間に見出しをつけてください）

この練習が文章に対する抵抗を小さくし、読解力とスピード力をつけることにもつながります。慣れるまでは大変ですが、毎日続けてやってみましょう！

法則 23：新聞コラムを毎日読むと読解力が身につく、見出しをつけることで表現力がアップする。

法則 24：新聞で不明なところはおうちの人に質問を！読解力がつくと全ての教科がアップする。